松江市文化財調査報告書　第165集

西の原造成計画に伴う発掘調査報告書

長廻遺跡

平成27(2015)年３月

島根県松江市教育委員会
公益財団法人松江市スポーツ振興財団

松江市文化財調査報告書　第165集

西の原造成計画に伴う発掘調査報告書

長廻遺跡
（ながさこいせき）

平成27(2015)年３月

島根県松江市教育委員会
公益財団法人松江市スポーツ振興財団

例　　言

1．本書は、西の原造成計画に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．本書で報告する発掘調査は、松江市教育委員会の委託を受け、平成 26 年度に公益財団法人松江市スポーツ振興財団が実施した 1 次調査と、同年度に松江市歴史まちづくり部まちづくり文化財課埋蔵文化財調査室調査係が実施した 2 次調査（立会調査を含む）の成果が含まれている。

3．調査の遺跡名称、所在地、現地調査期間、開発面積、調査面積、調査組織は下記のとおりである。

⑴　遺跡の名称、所在地は以下のとおりである。

名　　称　　長廻遺跡（ながさこいせき）

所　在　地　　島根県松江市上乃木四丁目 2598-1 外

⑵　現地調査期間　　1 次調査　　平成 26 年 4 月 14 日～平成 26 年 5 月 15 日

2 次調査　　平成 26 年 12 月 15 日～平成 27 年 1 月 6 日

⑶　開発面積及び調査面積

開 発 面 積　　1,312.74㎡

調 査 面 積　　504.4 ㎡

（1 次調査：251.1㎡，2 次調査：253.3㎡）

⑷　調査組織

依 頼 者　個人

主 体 者　松江市教育委員会　　教 育 長　清水　伸夫

事 務 局　松江市歴史まちづくり部　　部　　長　安田　憲司

〃　　文化財統括官（埋蔵文化財調査室長兼務）錦織　慶樹

〃　まちづくり文化財課　　課　　長　永島　真吾

〃　〃　埋蔵文化財調査室　調査係　　係　　長　赤澤　秀則

〃　〃　〃　〃　　専門企画員　宍道　元

〃　〃　〃　〃　　主　　任　徳永　隆

調査指導　島根県教育庁　文化財課　　主　　幹　深田　浩

【1 次調査】

実 施 者　公益財団法人松江市スポーツ振興財団　　理 事 長　清水　伸夫

〃　埋蔵文化財課　　課　　長　三島　秀幸

〃　〃　調査係　　係　　長　古藤　博昭

〃　〃　〃　　調 査 員　江川　幸子（調査担当者）

〃　〃　〃　　調査補助員　宇津　直樹

調査に携わった発掘作業員（50 音順）

今村邦子、今村ひろ子、今村正人、佐伯規男、角田ミヤ子、長岡雅治

秦岡民枝、秦岡富士子、細田信子、細田勇治、峯谷一雄、吉岡永子

【2次調査】

実施者　　松江市歴史まちづくり部　まちづくり文化財課

埋蔵文化財調査室	調査係	主任	徳永　隆	（調査担当者）
〃	〃	主任	青山　賢	
〃	〃	主任	川西　学	
〃	〃	主任主事	日野　一輝	
〃	〃	嘱託員	小川真由美	
〃	〃	嘱託員	高尾万里子	
〃	〃	嘱託員	高橋真紀子	

4．本書に記載した遺物の洗浄・復元・実測・図面浄書は以下のものがおこなった
塩田陽子、宇津、江川

5．本書に掲載した現場写真は江川（1次調査）と徳永、川西（2次調査）が撮影し、遺物写真は江川が撮影した。

6．本書の執筆は、第1章を徳永、第2～4章を松江市埋蔵文化財調査室の協力を得て江川がおこない、編集は江川がおこなった。

7．本書における方位は公共座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した公共座標第Ⅲ系の値である。またレベル値は海抜標高を示す。

8．本書における遺構記号は、下記のとおりとした。
SP：小土坑　　SB：掘立柱建物跡　　SK：土坑　　SX：不明遺構、その他

9．出土遺物、実測図及び写真等の資料は、松江市教育委員会において保管している。

目　　次

第１章　調査に至る経緯 …… 1

第２章　位置と歴史的環境 …… 2

第３章　調査の方法と成果 …… 4

第１節　調査の方法と概要 …… 4

第２節　層序 …… 4

第３節　遺構 …… 8

第４節　遺物 …… 15

第４章　総　括 …… 16

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第１図　島根県・松江市位置図 …… 1
第２図　長廻遺跡と周辺の遺跡（S ＝ 1/25000）…… 3
第３図　長廻遺跡位置図（S ＝ 1：5000）…… 5
第４図　調査範囲とグリッド設定図（S ＝ 1：600）…… 5
第５図　調査成果図（S ＝ 1：200）…… 6
第６図　土層図（S ＝ 1：100）…… 7
第７図　掘立柱建物跡（S ＝ 1：80）…… 9
第８図　土器埋納坑 SP07（S ＝ 1：10）…… 10
第９図　土壙墓（S ＝ 1：40）…… 11
第 10 図　落とし穴状土坑（S ＝ 1：40）…… 12
第 11 図　性格不明の土坑 SX03（S ＝ 1：80）…… 13
第 12 図　性格不明の土坑 SX06（S ＝ 1：80）…… 14
第 13 図　遺物実測図（S ＝ 1：3）…… 15

図　版　目　次

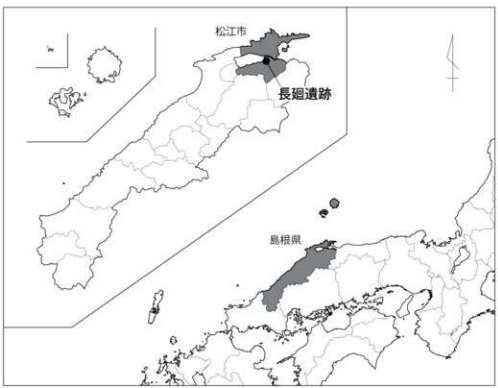
図版１（上）　長廻遺跡調査前（南東から）
（下）　一次調査完掘状況（西から）
図版２（上）　一次調査完掘状況（北から）
（下）　ピット群近景（西から）
図版３（上）　土器埋納坑 SP07　蓋をされた小型丸底壺出土状況（東から）
（下）　土器埋納坑 SP07　小型丸底壺とトチの種子出土状況（東から）
図版４（上）　土壙墓 SK27（北から）
（下）　落とし穴状土坑 SK04　サブトレンチ底面で検出（上から）
図版５（上）　落とし穴状土坑 SK05（南から）
（下）　落とし穴状土坑 SK08（南から）
図版６（上）　落とし穴状土坑 SK26（北から）
（下）　落とし穴状土坑 SK30（西から）
図版７（上）　性格不明の土坑 SX03 完掘状況（南東から）
（下）　性格不明の土坑 SX03 土層堆積状況（東から）
図版８（上）　性格不明の土坑 SX03 北側拡張調査区（北西から）
（下）　性格不明の土坑 SX03 の北側堆積土検出状況（南西から）
図版９（上）　性格不明の土坑 SX06 完掘状況（南から）
（下）　性格不明の土坑 SX06 土層堆積状況（東から）
図版 10　　出土遺物

第１章　調査に至る経緯

当該地を含めた付近一帯における埋蔵文化財の有無について、松江市文化財課（平成 26 年４月からまちづくり文化財課）へ照会があり、平成 17 年７月に当該開発区域において試掘調査を実施したところ、その一部で遺跡が確認された。これにより平成 23 年６月付けで土地所有者から遺跡発見の届出がなされ、当該開発区域の一部が「長廻遺跡」として周知されることとなった。

その後、周辺の開発が実施され、遺跡の範囲は畑地として残されることとなったが、平成 25 年度に当該遺跡の範囲についても宅地造成の計画が立ち上がった。このことについて、事業者と遺跡の取扱いについて協議を重ねたが、新設道路及び擁壁設置部分の一部については、遺跡を保護することは困難であるとの結論に至り、平成 25 年 10 月に文化財保護法第 93 条に基づく発掘の届出が提出された。これを受け、島根県文化財課と協議した結果、遺跡の一部（道路、擁壁部分）については発掘調査の指示がなされることとなり、平成 26 年４月～５月にかけて、松江市スポーツ振興財団により現地調査（１次調査）が実施された。

一方、上記の現地調査（１次調査）終了後、事業者から工事計画に変更が生じた旨の協議があった。これにより、新たに宅地部分や擁壁設置部分等で掘削が生じる部分が発生したことから、平成 26 年 11 月に改めて発掘の届出が提出されることとなり、この範囲についても発掘調査及び立会調査を実施する旨の指示が島根県教育委員会からなされた。このため、平成 26 年 12 月～平成 27 年１月に２次調査を実施することとなった。なお、１次調査の結果等から、新たな調査範囲における遺構の分布状況は希薄なものと予想されたことから、２次調査は事業者の協力を得て、松江市教育委員会（埋蔵文化財調査室）が直営で実施した。



第１図　島根県・松江市位置図

第２章　位置と歴史的環境

1. 位置

長廻遺跡は島根県上乃木四丁目 892 番 1 外に所在する（第２図 1）。

JR 松江駅の南方約 2.2㎞にあたり、遺跡は低丘陵南側の緩やかな傾斜地に位置している。

地理的にみると、当地は標高 15 ～ 30m の微高地が広がる乃木段丘のやや西寄りにあたる。その北側は宍道低地帯となり、砂州から発達して近世には埋め立てもおこなわれた松江藩の城下町に至る。

2. 歴史的環境

長廻遺跡の周辺に分布する、古墳時代までの主要遺跡について紹介しておく。

旧石器時代の遺構は発見されていないが、田和山遺跡（49）から玉髄製のナイフ形石器、台形様石器、楔形石器のほか碧玉製の縦長剥片が出土している。

縄文時代には、当時は入海の縁辺部であった馬橋川下流と乃木段丘の北辺部に遺跡が集中している。勝負遺跡（65）では後期の竪穴建物跡と平地式建物跡各 1 棟が検出されており、松江市内では数少ない集落跡として貴重である。近くの石台遺跡（24）では広い範囲から前、後、晩期の土器が出土している。遺構としては土坑 1 基しか検出されていないが、その土坑埋土からは籾痕のついた晩期土器片多数と炭化米、石鏃などの石器が出土し、周辺では晩期には稲作がおこなわれていたと想定されている。そのほか、タルミ I 遺跡（28）から黒曜石、はぜ岡遺跡（20）、鷹日神社前遺跡（21）、西の原遺跡（18）、宇賀 I 遺跡（19）からは石斧が出土している。

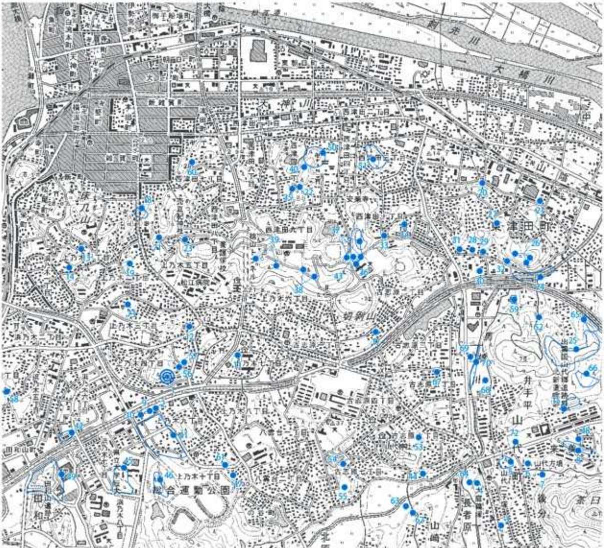
弥生時代前期末から中期にかけては狭い丘陵頂部を中心に三重の環壕が廻らされた特異な遺跡、田和山遺跡（49）があり、環壕の中から中細型銅剣を模した磨製石剣のほか、多数の石鏃、つぶて石など、祭祀や戦闘に関連した遺物が出土し、住居跡は環壕の外側で検出された。友田墳墓群（42）は中期中葉から後期前葉にかけての墳墓群で、1 つの丘陵上に土壙墓群、墳丘墓群、四隅突出型墳丘墓の 3 種類の墳墓が造られていることを特徴とする。このうち 6 基の墳丘墓は中期中様に築かれているので、田和山遺跡との関連性が指摘されている。後期後半には後廻遺跡（73）で集落が営まれており、丘陵頂部平坦面から竪穴建物跡や掘立柱建物跡が検出されている。東城ノ前遺跡（51）は後期の貼石墓 4 基から成る墳丘墓群で、うち 2 基が四隅突出型墳丘墓と推定されている。

古墳時代前期になると茶山遺跡（58）で小規模古墳 3 基が築造されているほか、田和山遺跡の南方に袋尻古墳群が築かれている。中期には長廻遺跡から谷を挟んだ約 300m 南の丘陵に長砂古墳群（41）が造営されている。長砂古墳群は一辺 10m 前後の 16 基の方墳で構成される群集墳で、副葬品として初期須恵器と多くの鉄製品が出土している。また、奥山古墳群（46）では 5 世紀後半頃と考えられる小規模古墳 7 基が築かれている。このように、長廻遺跡の周辺では小規模ながら多くの中期古墳が築かれていることが知られる。

後期前半には、長廻遺跡の南西 200m の低地に全長 36m の前方後方墳、乃木二子塚古墳（9）が築かれており、長砂古墳群の後継者が勢力を拡大して築いた古墳ではないかと考えられている。後期

後半になると、松江市では茶臼山西麓に山代二子塚古墳（5）や山代方墳（6）などの大規模古墳で構成される山代・大庭古墳群が造営され、出雲地方東部を席巻した強大な勢力が誕生している。そして、それらに次ぐ規模の古墳は意宇平野の西側に集中して築かれた。長廻遺跡周辺には小規模古墳 4 基から成る論田古墳群（37）や 3 基の横穴墓から成る奥山遺跡（45)、美月横穴墓（60）浅井横穴群（35)、喰ガ谷横穴群（33）など、いたって小規模な古墳や横穴墓群が分布しているにすぎない。

参考資料　松江市史編纂委員会『松江市史 史料編 2 考古資料』2012 年ほか



1 長廻遺跡
2 下沢遺跡
3 山代遺跡
4 大庭鶏塚古墳
5 山代二子塚古墳
6 山代方墳
7 永久宅後古墳
8 狐谷横穴群
9 乃木二子塚古墳
10 二子塚古墳
11 向荒神古墳
12 経塚古墳
13 毘沙門山古墳群
14 荒神古墳
15 山代郷北新造院跡
16 山代郷南新造院跡
17 古志原遺跡
18 西ノ原遺跡
19 宇賀遺跡
20 はぜ岡遺跡
21 鷹日神社前遺跡
22 小沢横穴群
23 檜山古墳群
24 石台遺跡
25 南外古墳群
26 高杉古墳群
27 伝兵衛山古墳
28 タルミⅠ遺跡
29 タルミⅡ遺跡
30 タルミⅢ遺跡
31 タルミⅣ遺跡
32 舟津田遺跡
33 喰ヶ谷横穴群
34 喰ヶ谷古墳群
35 浅井横穴群
36 論田横穴群
37 論田古墳群
38 室藤古墳群
39 奥金見古墳群
40 城ノ前古墳群
41 長砂古墳群
42 友田遺跡
43 論田遺跡
44 向山古墳群
45 奥山遺跡
46 奥山古墳群
47 矢の原遺跡
48 狐谷古墳
49 田和山遺跡
50 西城ノ前遺跡
51 東城ノ前遺跡
52 上谷遺跡
53 山代神社前遺跡
54 香ノ木池遺跡
55 向山西遺跡
56 長廻Ⅱ遺跡
57 乃木西廻遺跡
58 茶山遺跡
59 櫨岡Ⅱ遺跡
60 美月横穴墓
61 矢の原Ⅱ遺跡
62 山崎遺跡
63 橋本遺跡
64 茶臼遺跡
65 勝負遺跡
66 来美東遺跡
67 富原遺跡
68 井手平遺跡
69 九反田遺跡
70 中曽根遺跡
71 檜山古墳群
72 井出平山古墳群
73 後廻遺跡

第 2 図　長廻遺跡と周辺の遺跡（S＝1/25000）

第３章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法と概要

長廻遺跡は、標高 19m 前後の丘陵の南面する緩やかな傾斜地にある（第３図）。

調査は、まず 25㎝コンタで調査前地形測量図を作成し、調査区に 5m グリッドの設定をおこなった（第４図）。このグリッドは、国土座標 X ＝ -61245、Y ＝ 81345 の交点を基点として、南へ 5m ピッチでアラビア数字（1、2、3、…）、東へ 5m ピッチでアルファベット（A、B、C、…）を与えたもので、グリッド名はアルファベットの後にアラビア数字を組み合わせて呼称した。たとえば、第４図の☆印グリッドは H7 区である。遺構にともなわない遺物はグリッドごとに取り上げることとした。

掘削は、試掘調査の際に旧耕作土直下がほぼ地山であることを確認していたので、重機を使用して土の状況を見ながら地山の上約 5㎝程度まで掘り下げ、その後は全て人力でおこなった。耕作土中を含めて遺物は全く出土しなかったが、地山面を精査すると、ピットや土坑などの遺構平面プランが多数検出された。平面プランが分かりにくい遺構についてはサブトレンチを掘り、その壁面で遺構の形状等の確認をおこない、遺構は基本的に半截または畦を残して埋土層を観察して記録をとった。

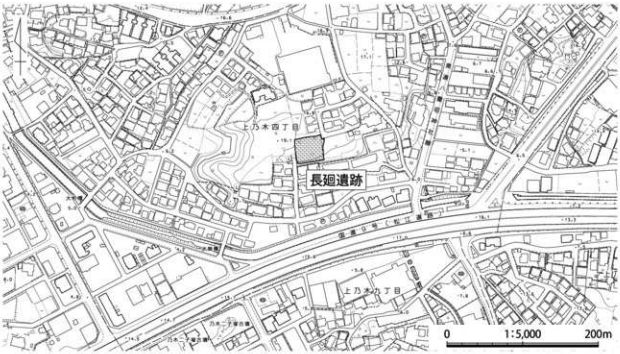
その結果、調査区の北西を中心として多数のピットを検出したが、ピットから建物跡を復元することはできなかった。しかし、建物跡を構成すると想定されるピットが存在し、柱穴列５列（SB01 ～ 05）を復元することができた。また、ピット群の中からは土器埋納坑１基（SP07）も検出された。遺構面や表土から遺物は出土していないが、SP07 に埋納された土器や柱穴（SP12）から出土した土器片が古墳時代中期の土師器であることから、その頃の遺構である可能性が考えられる。また、調査区中央付近で検出したピット（SP02）の埋土からは弥生時代後期の土器片が出土していで、時期の異なるピットも存在するようである。そのほかの遺構としては、時期不明の土壙墓１基（SK27）、落とし穴状遺構５基（SK04・05・08・26・30）、性格不明の土坑４基（SX03・06・25・28）が検出された（第５図）。

遺物は弥生土器と土師器のほか、トチの種子が出土した。掘削面積の割には出土数が少なく、コンテナ１箱に収まる程度の量であった。

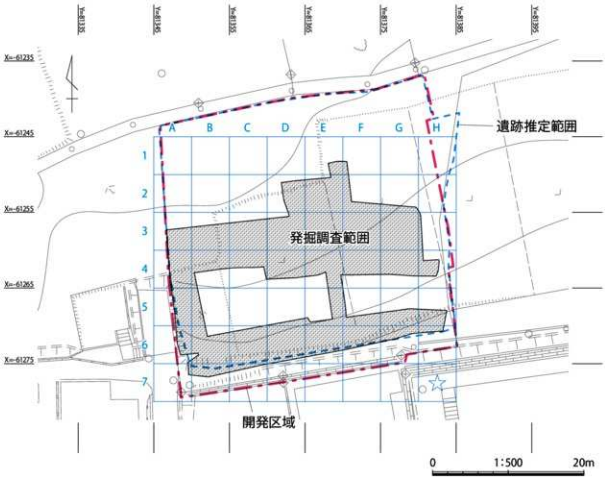
第２節　層序

第５図の A-A′、B-B′、C-C′で土層を観察したものが第６図である。

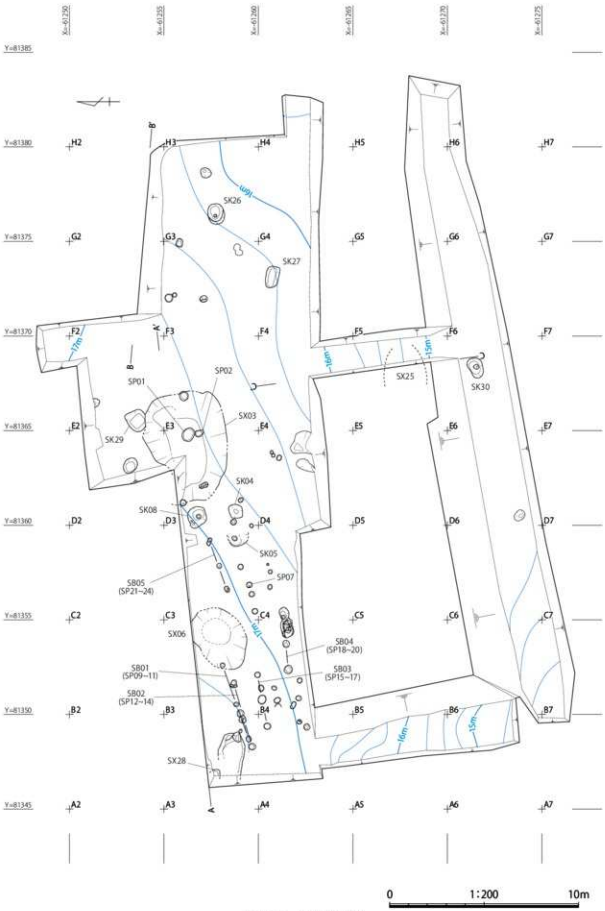
基本層序は上から旧耕作土（やわらかい暗灰褐色土）、褐色土、地山である。地山の上層は黄褐色系の比較的軟質の層で、その下は同色の堅い砂質土、その下にはマンガンの非常に堅い層がみられた。調査区はどこもほぼ同様の層序を呈していた。



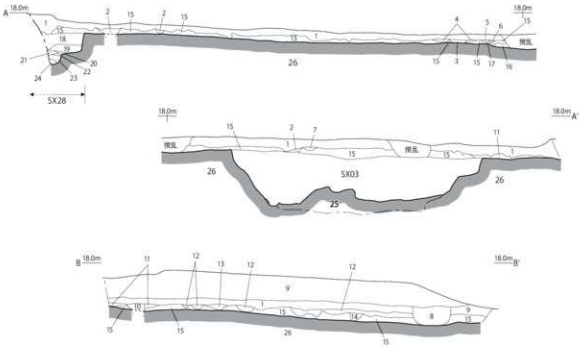
第３図　長廻遺跡位置図



第４図　調査範囲とグリッド設定図

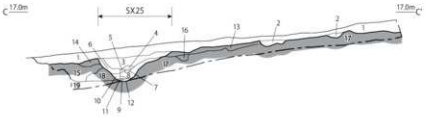

X=61230
X=61235
X=61240
X=61245
X=61250
X=61255
Y=81385
Y=81380
Y=81375
Y=81370
Y=81365
Y=81360
Y=81355
Y=81350
Y=81345
H2
H3
H4
H5
H6
H7
G2
G3
G4
G5
G6
G7
F2
F3
F4
F5
F6
F7
E2
E3
E4
E5
E6
E7
D2
D3
D4
D5
D6
D7
C2
C3
C4
C5
C6
C7
B2
B3
B4
B5
B6
B7
A2
A3
A4
A5
A6
A7
SK26
SK27
SP01
SP02
SK03
SK29
SK04
SK08
SK05
SP07
SB05
(SP21~24)
SX06
SB04
(SP18~20)
SB03
(SP15~17)
SB01
(SP09~11)
SB02
(SP12~14)
SX28
SK25
SK30
17m
16m
15m
0
1:200
10m

第５図　調査成果図



1　暗灰褐色土（耕作土）
2　暗黄褐色土
3　暗褐色土
4　やや暗い褐色土
5　やや暗い黄褐色土
6　暗灰褐色土
7　暗灰褐色土に橙褐色土が斑に混じる
8　暗灰褐色粘質土
9　淡灰色土～暗灰色土（客土）
10　暗灰色土に褐色ブロック混じる
11　暗灰褐色土にやや暗い褐色土混じる
12　暗褐色土
13　暗灰色土に少し褐色土が混じる
14　暗黄褐色土
15　褐色土
16　白色ブロック混じる明橙褐色土
17　白色ブロック
18　褐褐色砂質土
19　やや明るい褐色土
20　明褐色土
21　暗褐色砂質土
22　明褐色砂質土
23　撹乱された暗褐色粘質土を含む砂質土
24　暗褐色砂質土
25　黄褐色砂質土（地山）
26　黄褐色土（地山）

東西方向土層断面図（A-A',B-B'）



1　暗灰褐色土（耕作土）
2　暗灰褐色土と褐色土の混合土
3　黄褐色土
4　褐色土
5　やや明るい黄褐色土
6　やや暗い黄褐色土
7　黄褐色土
8　やや暗い黄褐色土（下部に暗黄褐色土）
9　暗黄褐色土に淡褐色土混じる
10　黄褐色土に橙褐色土混じる
11　暗黄褐色土
12　暗黄褐色土、地山ブロックが少し混じる
13　黄褐色土（地山）
14　やや暗い暗黄褐色粘土（地山）
15　橙褐色粘土（地山）
16　橙褐色土、下層との境に灰色土（地山）
17　黄褐～橙褐色土（地山）
18　橙褐色土（地山）
19　やや明るい黄褐色土（地山）

南北方向土層断面図（C-C'）

0　1:100　5m

第６図　土層図

第３節　遺構

1．掘立柱建物跡（第５・７図）

調査区の北西部を中心とする、標高 17.0m 付近で多くのピットを検出した。

グリッドで表記すると A3・A4・B3・B4・C3・C4 区である。

ピットは直径が小さくて浅いものが多く、等高線方向に並行する傾向がみられた。ピットを半截するとしっかりした柱痕を表す土層が確認できるものがあり、掘立柱建物跡を構成する柱穴の可能性が高いと思われるが、調査範囲内では明確に建物跡を復元することはできなかった。

遺構面で遺物は出土していないが、SP14 の埋土から古墳時代中期頃と思われる土師器の破片が出土しているので、その頃の掘立柱建物跡の一部と考え、SB01 ～ 05 を復元した。

SB01　調査区内では最も標高の高い位置にある。東から SP09、SP10、SP11 で構成され、柱穴間の芯々距離は東から 2.2m、2.0m。各柱穴の上端直径は 30㎝前後、深さは 22 ～ 30㎝で、埋土はいずれも１層で、遺物は出土しなかった。

SB02　SB01 とほぼ重複する位置にある。東から SP12、SP13、SP14 で構成され、柱穴間の芯々距離は東から 1.7m、1.9m である。各柱穴の上端直径は 35 ～ 40㎝、深さ 30㎝強で、SP12 と SP14 を半截したところ直径 10㎝程度の柱の痕跡がみられ、SP13 は１層であった。SP14 から古墳時代中期頃と思われる土師器の壺頸部破片１点（第 13 図５）と甕の胴部破片８点、SP12 から小さな土器片が出土した。

SB03　東から SP15 ～ 17 で構成され、柱穴間の芯々距離は東から 1.3m、1.4m。各柱穴の上端直径は 30 ～ 50㎝、深さは 14 ～ 18㎝で、地形が東に下がっているので東に行くにつれて浅くなっている。埋土はいずれも１層で、遺物は出土しなかった。

SB02 の南 1.5m にほぼ平行して位置するものであるが、西端がずれていることや埋土の状況から判断すると、ともに掘立柱建物跡を構成する柱穴列とは考え難い。

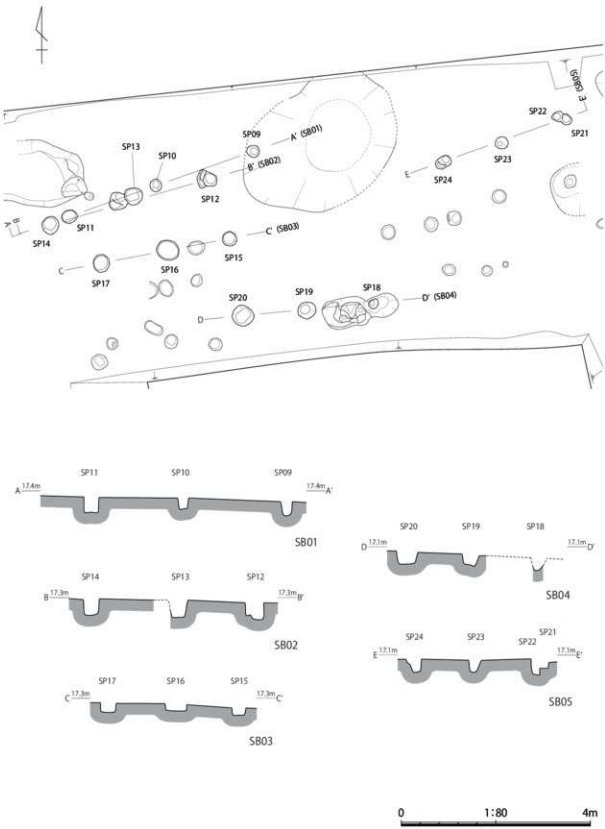
SB04　東から SP18 ～ 20 で構成され、柱穴間の芯々距離は東から 1.4m、1.4m。各柱穴の上端直径は 45㎝、深さは 23㎝前後で、SP27、SP25 の埋土は水平方向に２層に分かれて炭を含んでいた。遺物は出土しなかった。

SB05　東から SP21・23・24 で構成され、柱穴間の芯々距離は東から 1.3m、1.2m。各柱穴の上端直径は 25㎝、深さは 25㎝前後、埋土はいずれも１層で、遺物は出土しなかった。

2．弥生時代のピット（第５図）

前述したピット群から東にやや離れた場所、D2 ～ 4・E2・E3 区で疎らに点在するピットが多数検出され、その内 SP02 の埋土から弥生時代後期初頭に比定される甕の破片（第 13 図１・３・４）が出土した。破片数は３点で、胎土や焼成、色調、大きさなどが近似しているので、同一個体の可能性も考えられる。ピット中央部からやや大きめの土器が出土しているので、柱穴の可能性は低い。ピットの平面形は楕円で上端径は 40 × 30㎝、深さ 26㎝。

なお、SP02 の周囲で検出したピットは、遺物が出土していないため時期は不明である。SP02 と同時期かもしれないが、上記「1．掘立柱建物跡」で記した古墳時代中期頃、または全く異なる時期のものの可能性がある。隣接する SP01 には炭と焼土が詰まっていた。上端径 60㎝、断面 U 字状で深さ 20㎝。


SP09
A' (SB01)
SP13
SP10
B' (SB02)
SP12
SP11
SP14
C' (SB03)
SP15
SP16
SP17
SP20
SP19
SP18
D' (SB04)
SP22
SP21
SP23
SP24
SB01
SB02
SB03
SB04
SB05
0
1:80
4m

第７図　掘立柱建物跡

3. 土器埋納坑 SP07（第８図）

ピット群の中で、土器埋納坑１基（SP07）を検出した。

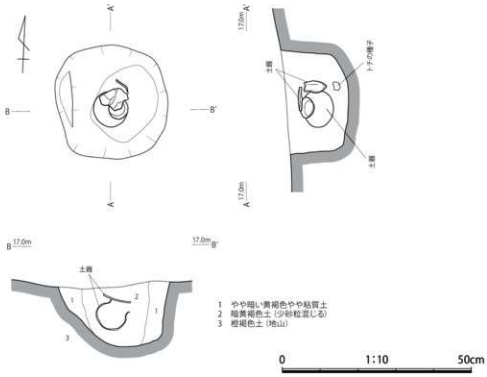
SP07 は上端直径 30㎝、下端直径 17 ～ 20㎝、深さ 16㎝で、西側の壁が若干斜めに掘られていた。

坑内には、底から 3㎝浮いたレベルに口縁部を欠損した古墳時代中期頃と思われる小型丸底壺１点（第 13 図６）がほぼ正位置で据わり、擬口縁の上には土師器の甕胴部破片が小型丸底壺の開口部に蓋をするかのように置かれており、壺の脇には甕胴部の破片が縦方向に添えられていた。この状況から、小型丸底壺の中には何かが納められていたと考えられるが、残存していなかった。そのほか、坑内の壺の外側からトチの種子１個が出土した。

SP07 を半截すると中心部と周縁部では土層が異なり、土器やトチの種子がともに坑の底から浮いた状況で検出されたので、坑を掘って直に土器を納めたものではないことは確かだが、具体的な埋納方法は不明である。

4. 土壙墓 SK27（第９図）

東西方向に長い隅丸方形の土壙墓で、上端は全長 1.14m、幅 0.74m、下端は全長 1.03m、幅 0.35m、深さ 52㎝。横断面を観察すると、最下層（9）とその直上層（8）の上面はほぼ水平で、遺構検出面から水平の層上面に向かっては左右から６・７層が斜めに下がり、６層と７層の間には１～５層が堆積している。小さな組合木棺の埋土を示すと考えられるが、側板の痕跡を明瞭に検出することができなかった。遺物は出土しなかった。



第８図　土器埋納坑 SP07

5. 落とし穴状土坑（第 10 図）

全部で 5 基検出した。いずれも遺物は出土していない。

SK04　周囲に比べて若干砂質の多い範囲であったが、遺構面の精査時には明確な平面プランを検出することができなかった。そこでサブトレンチを掘って観察をおこなった結果、断面は把握できなかったが、深さ 1.1m のサブトレンチ底面に 7 層が平面円形に入り込んだ状況を確認した。底に向けて径が小さくなり、中央に小坑がないが落とし穴状遺構と判断した。上端直径は推定 100㎝強、下端直径 22㎝、遺構面からの深さ 165㎝。

SK05　SK04 と同様に遺構面での検出が困難であったため、サブトレンチの断面で確認したところ、東西方向のサブトレンチ西端で堆積層を確認した。円筒状に掘られた、底部中央に小坑がある落とし穴状遺構である。上端直径は推定 90㎝、下端直径は推定 80㎝、深さ 106㎝。小坑は上端直径 18㎝、下端直径 12㎝、深さ 46㎝。

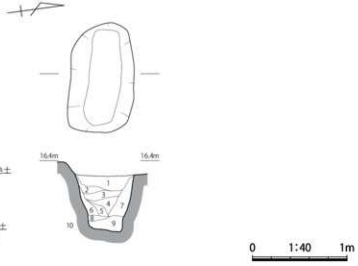
SK08　SK05 の 2m 北に位置する。円筒形に掘られた、中央に小坑がない落とし穴であるが、底部中央に浅いくぼみがみられる。上端直径 95㎝、下端直径 48㎝、深さ 105㎝。底部の浅いくぼみは上端直径 24㎝、下端直径 10㎝、深さ 8㎝。

SK26　SK04 の 16m 東に位置する。下方に向けて極端に直径が小さくなる、円筒形に掘られた、底部中央に小坑がある落とし穴である。上端直径 88㎝、下端直径 52㎝、深さ 135㎝。小坑は上端直径 12㎝、下端直径 9㎝、深さ 24㎝。

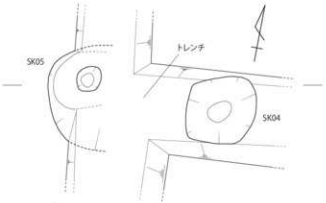
SK30　遺構調査区中央南端に位置する。下方に向けて若干直径が小さくなる、円筒形に掘られた、底部中央に小坑がある落とし穴状遺構である。上端直径 70 ～ 110㎝、下端直径 50 ～ 72㎝、深さ 85㎝。小坑は上端直径 22㎝、下端直径 6㎝、深さ 45㎝。

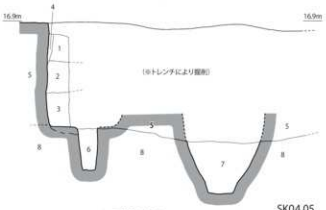
6. 性格不明の土坑

性格不明の土坑 4 基を検出した。いずれも地山面から掘り込まれ、埋土は細かく分層でき、堅く締まっている点が共通している。確実に共伴する遺物が出土していないため、時期、性格は不明である。



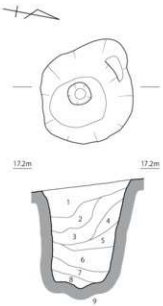
第 9 図　土壙墓 SK27





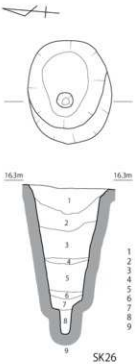
SK04,05

1　濃褐色粘質土
2　淡暗褐色砂質土
3　淡黒色砂質土
4　淡黒褐色粘質土
5　褐色粘質土（地山）
6　暗褐色土
7　ほくほくした褐色粘質土
8　黄褐色砂質土（地山）



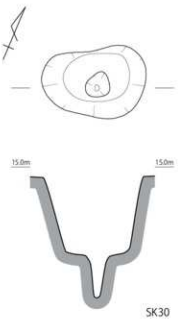
SK08

1　やや暗～暗黄褐色土に黄褐色土が斑に混じる
2　黄褐色土
3　暗黄褐色土に黄褐色土が斑に混じる
　（下部に向けて暗くなる）
4　黄褐色土に暗黄褐色土が斑に混じる
5　暗褐色土に黄褐色土が少し混じる
6　やや暗い黄褐色土
7　やや暗い～暗橙褐色土
8　暗灰色土
9　黄褐色砂質土（地山）



SK26

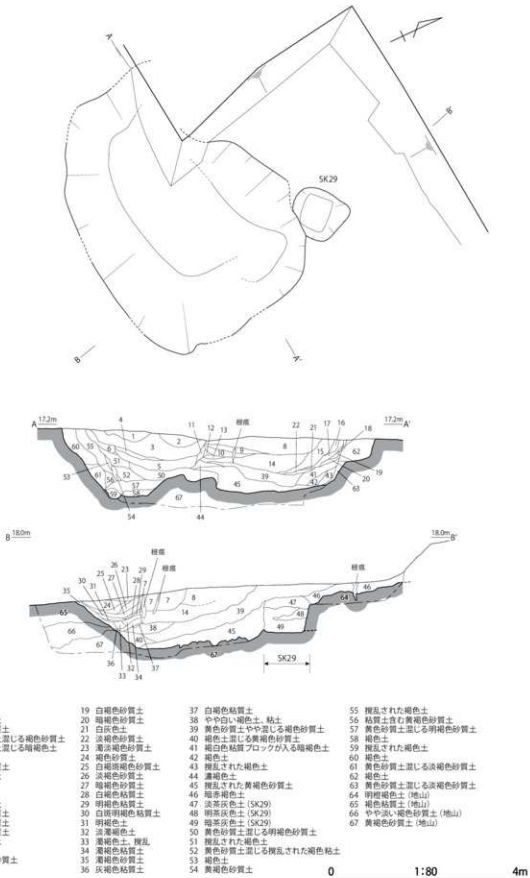
1　やや暗い～暗黄褐色土
2　淡黄褐色土
3　暗黄褐色土
4　淡黒色土
5　濃褐色粘質土
6　黒褐色粘質土
7　褐色土
8　暗褐色土
9　黄褐色砂質土（地山）



SK30

0　1:40　2m

第 10 図　落とし穴状土坑



1　暗褐色土
2　褐色砂質土
3　淡褐色砂質土
4　黄色砂質土混じる褐色砂質土
5　黄色砂質土混じる暗褐色土
6　濃褐色土
7　淡褐色粘質土
8　褐色粘質土
9　濃褐色土
10　暗褐色土
11　黄色砂質土
12　暗褐色砂質土
13　淡褐色砂質土
14　黄褐色砂質土
15　淡赤褐色土
16　濃褐色土
17　濃黄褐色砂質土
18　黒色土
19　白褐色砂質土
20　暗褐色砂質土
21　白灰色土
22　淡褐色砂質土
23　濃淡褐色砂質土
24　褐色砂質土
25　白褐斑褐色砂質土
26　淡褐色砂質土
27　暗褐色砂質土
28　白褐色粘質土
29　明褐色粘質土
30　白斑明褐色粘質土
31　明褐色土
32　淡濃褐色土
33　濃褐色土、撹乱
34　濃褐色粘質土
35　濃褐色砂質土
36　灰褐色粘質土
37　白褐色粘質土
38　やや白い褐色土、粘土
39　黄色砂質土やや混じる褐色砂質土
40　褐色土混じる黄褐色砂質土
41　褐色粘質ブロックが入る暗褐色土
42　褐色土
43　撹乱された褐色土
44　濃褐色土
45　撹乱された黄褐色砂質土
46　暗赤褐色土
47　淡茶灰色土（SK29）
48　明茶灰色土（SK29）
49　暗茶灰色土（SK29）
50　黄色砂質土混じる明褐色砂質土
51　撹乱された褐色土
52　黄色砂質土混じる撹乱された褐色粘土
53　褐色土
54　黄褐色砂質土
55　撹乱された褐色土
56　粘質土含む黄褐色砂質土
57　黄色砂質土混じる明褐色砂質土
58　褐色土
59　撹乱された褐色土
60　褐色土
61　黄色砂質土混じる淡褐色砂質土
62　褐色土
63　黄色砂質土混じる淡褐色砂質土
64　明橙褐色土（地山）
65　褐色粘質土（地山）
66　やや淡い褐色砂質土（地山）
67　黄褐色砂質土（地山）

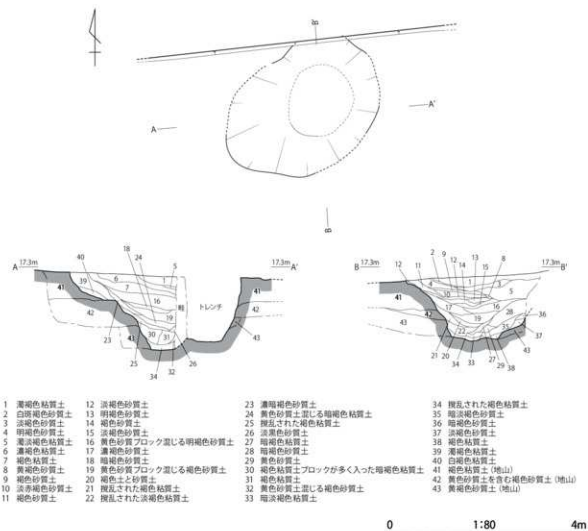
第 11 図　性格不明の土坑 SX03

SX03（第 11 図）　平面プランは不整形な隅丸方形である。大きな土坑であるが、小さい土坑の集合体の可能性も考えられる。底は凹凸が著しい。この土坑の埋土上面からピット SP02 が掘り込まれているので、弥生時代後期初頭には埋まっていたものである。土坑掘削中に弥生時代後期の土器片 1 点（第 13 図 2）が出土したが、SP02 から出土した土器と同時期のものであり、埋土層には濁りがなく炭も出土していないことから、紛れ込みの可能性が高い。東西 5.7m、南北 4.4m、最深 1.45m。

SX06（第 12 図）　平面プランは不整形な楕円で、底には直径 1.5m 前後の平坦面がある。埋土は非常に細かく分層できる。遺物は出土しなかった。東西 3.2m、南北 2.8m、最深 1.6m。

SX25（第 5・6 図）　C–C′ 壁面の土層で検出したため平面プランは不明である。地山面から掘り込まれており、底に平坦面はみられない。遺物は出土しなかった。南北 2m、東西幅不明、最深 0.65m。

SX28（第 5・6 図）　一部が調査区内にかかっているが、大半は調査区外の北西にのびるため規模は不明である。遺物は出土しなかった。



第 12 図　性格不明の土坑 SX06

第４節　遺物（第 13 図）

ここでは遺構から出土した遺物を掲載する。

1・3・4 はピット SP02 から一括出土した弥生土器で、胎土と色調が近似していることから同一個体の可能性が考えられる。1 は甕の口縁部の小片である。胎土は 1㎜前後の石英粒を多く含み、焼成は良、色調は内外断面とも淡橙褐色。口縁端部には 3 条の擬凹線がめぐらされ、内面には石動を伴うやや強い横ナデが施されている。

3 は甕の肩部の小片である。胎土は 1㎜前後の石英粒を多く含み、焼成は良好、色調は外面・断面が淡灰色～淡褐色、内面が淡橙褐色。外面はナデが施された後に刺突文がつけられており、刺突文の下の部分が 5 単位残る。器壁は薄く、内面はケズリが施されている。

4 は甕の底部で、約 3 分の 1 が残る。胎土は 1㎜前後の石英粒を多く含み、焼成は良好、色調は外面・断面が淡灰色～淡褐色、内面が淡橙褐色。底部は薄い平底で、外面には不定方向のナデ、体部の立ち上りは横ナデ、内面は不定方向のケズリが施されている。復元底径 6.4㎝。

2 は性格不明の土坑 SX03 の掘削中に出土した、甕の口縁部の小片である。胎土は 0.5㎜程度の石英・長石粒を密に含み、焼成は良、色調は外面・断面が淡橙褐色、内面が淡黒色。口縁端部には 3 条の擬凹線がめぐらされ、内面には横ナデが施されている。外面には若干煤の痕跡が残る。

5 は柱穴 SP14 から出土した壷甕類の頸部付近の小片である。胎土は 0.5㎜前後の石英少量と長石微粒を多量に含み、焼成は良好、色調は外・内面が淡褐色、断面が淡灰色。外面は横ナデが施されているが、体部にはハケメの痕跡が残る。内面は頸部に横ナデ、体部にはケズリ後ナデが施されている。

6 は土器埋納坑 SP07 に埋納されていた小型丸底壷で、口縁部以外が完存している。胎土は石英と長石の微粒を多く含み、焼成は良好、色調は内外断面とも淡褐色で部分的に黒斑が入る。体部外面は不定方向のハケメで調整して底の中央部を若干尖らせ、内面は底部を指押え、体部を斜め方向のナデ上げで調整し、頸部周辺は内外面とも横ナデを施している。口縁部を欠損しているが、欠損部は擦って滑らかに調整し、擬口縁に仕上げている。欠損品の再利用、もしくは故意的に口縁部が打ち欠かれたものと考えられる。

第 13 図　遺物実測図

第４章　総　括

長廻遺跡ではピット群、落とし穴状土坑、性格不明の土坑などを検出した。

性格不明の土坑は、土坑内から遺物が出土していないため時期が不明で、形状や規模、配置等に規格性が見いだせなかった。ただ、埋土上面から弥生時代後期初頭の土器を包含したピット SP02 の平面プランが検出されたので、その時期には完全に埋まっていたことが確実である。類例は茶山遺跡[1]に近似したものがみられるが、そこでも時期、性格が分かっていないため、さらに新たな類例の発見を待って検討をおこないたい。

以下では、主な遺構である落とし穴状土坑とピット群から長廻遺跡の位置づけをおこなう。

落とし穴状土坑は全部で５基検出した。遺物が出土しておらず時期は不明だが、当遺跡の南西 2km に位置する福富Ⅰ遺跡でも同様の形態の落とし穴状土坑が多数出土しており、縄文時代に作られた遺構である可能性が高いと考察されている[2]ことから、ここで検出したものも同時代の遺構と考える。

落とし穴状土坑には底部中央に小坑のあるもの３基、小坑のないもの２基が混在した。松江市周辺では縄文時代の生活関連遺跡は当時の海浜部で発見されることが多く、近いところでは勝負遺跡で住居跡が検出され[3]、石台遺跡からは多くの縄文土器が出土している[4]。長廻遺跡は海浜部から少し山手に入った場所にあり、中・小動物の狩猟の場として利用されていたと考えられる。

ピット群は調査区の北西部に集中して検出されたもので、埋土から出土した土器より古墳時代中期頃のものと判断される。ピット断面には柱の痕跡をとどめるものがあり、等高線に沿ってならぶピット列があることを確認したが、掘立柱建物跡を完全に復元することはできなかった。しかし、ピットの大きさや間隔が当時の平均的な掘立柱建物跡に近いことから、掘立柱建物跡の一部が残存する状況である可能性が高い。また、ピット群の中には土器埋納坑１基も検出された。口縁部を欠損した小型丸底壷が甕胴部の破片で蓋をして埋納されたものである。この壷は柱穴から出土した土器とほとんど時間差がみられないことから、これらを全て含めて古墳時代中期頃の集落跡が存在していたと考える。

改めて周辺の地形を見ると、調査区の北には台地上の平坦地が広がっており、このあたりに集落跡の中心があったのかもしれないが、実際には見つかっていない。当遺跡も近年まで畑地として利用されていたように、周辺地においてはさらに後世の耕作や宅地化などによる改変が著しく、遺跡が消滅している状態であるのかもしれない。今回の調査では調査面積が狭いうえ遺物の出土量が少なかったため、集落跡の明確な具体像を示すことはできなかったが、ここに古墳時代中期の生活遺跡の存在が確認できたことは大きな成果であったと考える。

註（1）松江市教育委員会・公益財団法人松江市スポーツ振興財団『茶山遺跡』2014 年
（2）建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会『福富１遺跡・屋形１号墳』1997 年
（3）島根県教育委員会『南外２号墳・勝負遺跡』2007 年
（4）島根県教育委員会『石台遺跡Ⅱ』1993 年

写真図版

長廻遺跡調査前（南東から）

一次調査完掘状況（西から）

図版 2

一次調査完掘状況（北から）

ピット群近景（西から）

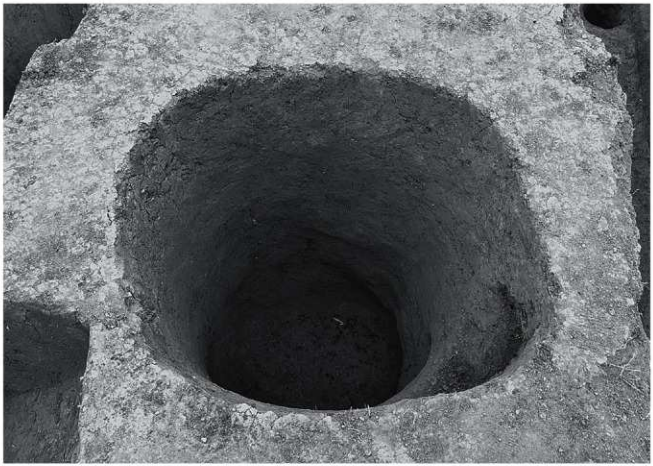
土器埋納坑 SP07　蓋をされた小型丸底壷出土状況（東から）

土器埋納坑 SP07　小型丸底壷とトチの種子出土状況（東から）

土壙墓 SK27（北から）

落とし穴状土坑 SK04　サブトレンチ底面で検出（上から）

落とし穴状土坑 SK05（南から）



落とし穴状土坑 SK08（南から）

落とし穴状土坑 SK26（北から）

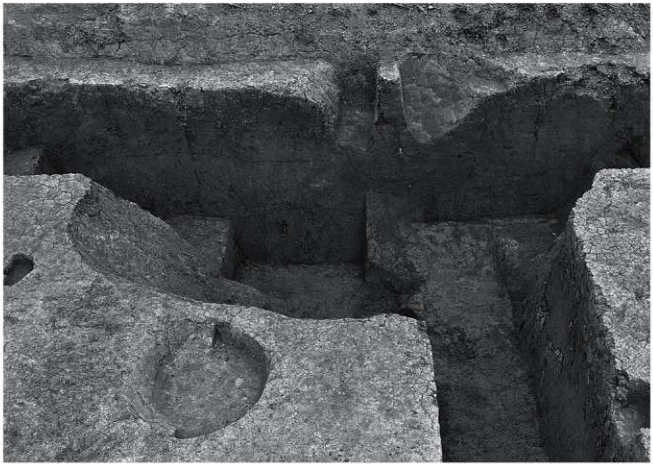
落とし穴状土坑 SK30（西から）

性格不明の土坑 SX03 完掘状況（南東から）

性格不明の土坑 SX03 土層堆積状況（東から）

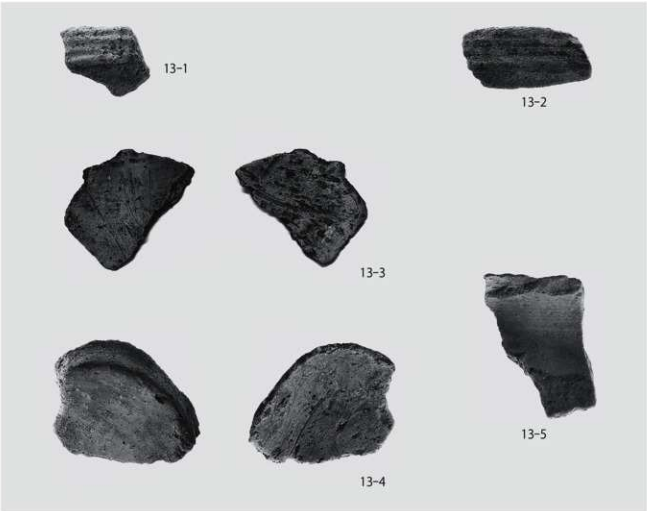
性格不明の土坑 SX03 北側拡張調査区（北東から）

性格不明の土坑 SX03 の北側堆積土検出状況（南西から）



性格不明の土坑 SX06 完掘状況（南から）

性格不明の土坑 SX06 土層堆積状況（東から）


13-1
13-2
13-3
13-4
13-5

13-6

報 告 書 抄 録

ふりがな	ながさこいせき
書名	長廻遺跡
副書名	西の原造成計画に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	松江市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 165 集
編著者名	江川幸子・徳永　隆
編集機関及び所在地	松江市教育委員会（歴史まちづくり部　まちづくり文化財課　埋蔵文化財調査室） 〒 690-8540　島根県松江市末次町 86 番地　　TEL 0852-55-5284 公益財団法人松江市スポーツ振興財団　埋蔵文化財課 〒 690-0401　島根県松江市島根町加賀 1263-1　TEL0852-85-9210
発行年月日	平成 27 年 3 月 31 日

所収遺跡（ふりがな）	所在地	コード		北緯	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	東経			
長廻遺跡（ながさこいせき）	島根県（しまねけん） 松江市（まつえし） 上乃木（あけのぎ） 四丁目（よんちょうめ） 2598-1 外（ほか）	32201	1040	35° 26′ 44″ 133° 3′ 50″	20140414 ～ 20140515 ・ 20141215 ～ 20150106	504.4㎡	宅地造成

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長廻遺跡（ながさこいせき）	散布地 集落跡	古墳時代	掘立柱建物跡 土器埋納坑 落とし穴状土坑 性格不明の土坑	土師器	

松江市文化財調査報告書　第165集

西の原造成計画に伴う発掘調査報告書

長廻遺跡

平成27(2015)年３月

編集・発行　島根県松江市教育委員会
公益財団法人松江市スポーツ振興財団

印　　刷　有限会社　高浜印刷
島根県松江市東長江町902-57